

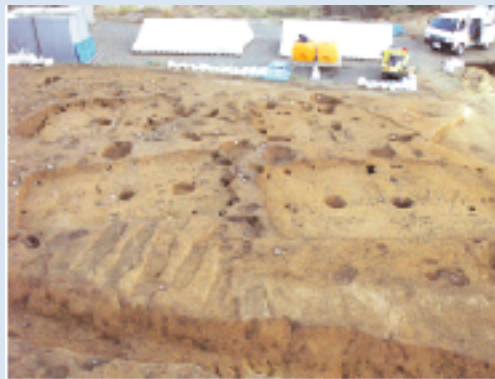
平成20年度「第11回ふるさと名取の歴史展」

「目で見る名取の歴史」

～今甦る悠久の歴史～



旧石器時代



縄文時代



弥生時代



古墳時代



中世



古代



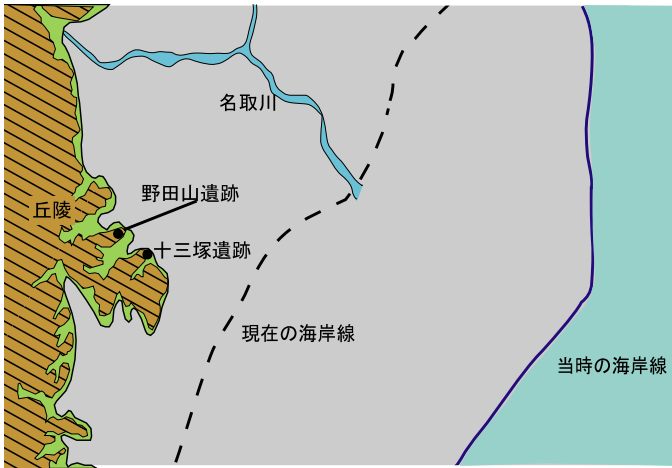
近世



近代

旧石器時代

旧石器時代の地形のようす



約2万年前の後期旧石器時代は、氷河期^{ひょうが}の最後の時期で、年間の平均気温が、 $2^{\circ}\text{C}\sim 7^{\circ}\text{C}$ 低かったと考えられています。そのため、仙台湾の海水面は現在より約100m低い位置にあり、海岸線は、現在の位置から45km以上沖合いにあったと考えられています。

このことから考えると、現在の市内の場所は、旧石器時代から見れば、ずっと内陸部の遠い地帯となっていたことでしょう。



野田山遺跡^{のだやまいせき}で旧石器が見つかったようす



出土した石器類



狩の前に道具を整えているようす

市内には、現在3ヶ所の旧石器時代の遺跡があります。その中で、野田山遺跡^{のだやまいせき}からは、調査により約2万年前の後期旧石器時代の石器がたくさん見つかっています。石器が出土したようすから推測すると、当時人々は、獲物を求め、この場所でキャンプをしながら道具を整え、狩に備えていたのではないかと考えられています。

縄文時代

【縄文時代の名取のようす】

8千年前から本格化した気候の温暖化は、6千年前頃にピークに達しました。これによって大規模な海水面上昇がおこり、仙台平野の低い部分にも海水が進入し、仙台平野は現在よりもはるかに北や西に大きく広がる湾を形づくっていました。現在、仙台空港がある所などは水没し、丘陵付近まで海水が入り込んでいたようです。その当時のようすは、丘陵沿いに分布する貝塚からも推測できます。そして、この時に出現した内海の多くは、波のおだやかな遠浅の海でした。河川からそこに流れ込むことによって発生した豊富なプランクトンは、貝や魚にとっても良い環境を作り出したことでしょう。そして、縄文人はそこから多くの水産資源を手に入れ、生活を安定させることができたのでしょ。内陸に入り込んだ海は、5千年前をさかいに退きはじめ、しだいに現在の海岸線に近づいていきますが、縄文人にとっては、今日のわれわれよりもはるかに海が身近な存在だったのでしょ。

縄文時代のあゆみ

時代	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期
三、〇〇〇	一〇、〇〇〇	六、〇〇〇	五、〇〇〇	四、〇〇〇	三、〇〇〇	
縄文の森があらわれる	弓矢がつくられ、小動物の狩り 土器づくりがはじまる	海面が上がリ、日本が大陸からはなれる	小規模な集落があらわれる 貝塚がつくられはじめる	大規模な集落がつくられる 人口がもっとも増える	貝塚がさかんにつくられ 土器の形が多様になる	東北地方を中心に気候が寒冷化 魚貝類が発達する
	がさかんになる	海面が上昇する	海面が上昇する	大規模な集落がつくられる	土器がもっとも増える	人口がもっとも増える
	宇賀崎貝塚	大木戸貝塚	今熊野遺跡	前野田東遺跡	金剛寺貝塚	十三塚遺跡



前野田東遺跡で見つかった土器



金剛寺貝塚で見つかったつりばり



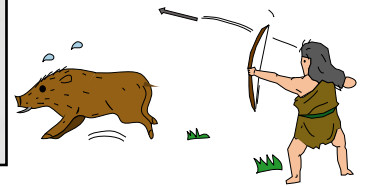
泉遺跡で見つかった石器



宇賀崎貝塚で見つかった貝刃（貝のナイフ）



やあ！
縄文の世界へ
ようこそ



いずみいせき
泉遺跡から見つかった縄文時代前期頃の村



竪穴住居を発掘しているようす



まえのだひがしいせき
前野田東遺跡で見つかった縄文時代中期頃の住居跡

いずみいせき まえのだひがしいせき めでしまかさしま
泉遺跡と前野田東遺跡は、愛島笠島
と塩手地区しおてで谷をはさんで隣り合う遺
跡です。泉遺跡からは、縄文時代の前
期（約6,000年前）の竪穴住居の他、
ゴミ捨て場や小規模な貝塚なども見つ
かっています。特に竪穴住居は全部で
70軒以上発見されており、建物の場
所を少しずつ変えながら長く住んでい
たのかもしれません。

また、まえのだひがしいせき
前野田東遺跡では、縄文時代
中期（約4,500年前）の住居跡が6軒
見つかっています。住居の数も少ない
ことから、比較的短い期間いとなに営まれた
小さな村だったと思われます。

縄文カレンダー



四季の暮らし

縄文時代の人々は、農業はまだしていませんでしたが、周囲にある自然の恵みを効率良く利用し、生活していたようです。

食料については、シカ・イノシシなどの獣、カモなどの鳥、イワシ・ウナギなどの魚、また、トチ・クルミなどの木の実、ゼンマイ・フキノトウなどの野草、アサリ・シジミなどの貝類を、道具を工夫し仲間と協力しながら、動植物の季節特性に合わせた狩猟や採集を行っていました。

四季の暮らしは、収穫物の時期を基本に、塩漬けなどの保存食料にするなどして、一定の生活のサイクルができており、その結果、ある程度、同じ場所に住み続ける事が可能だったと考えられています。

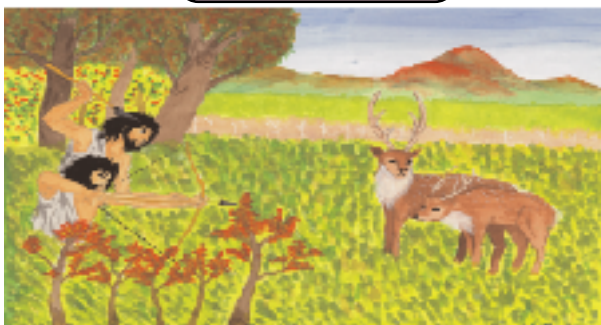
縄文人の装い



採集のようす



狩りのようす



おとし穴想定図

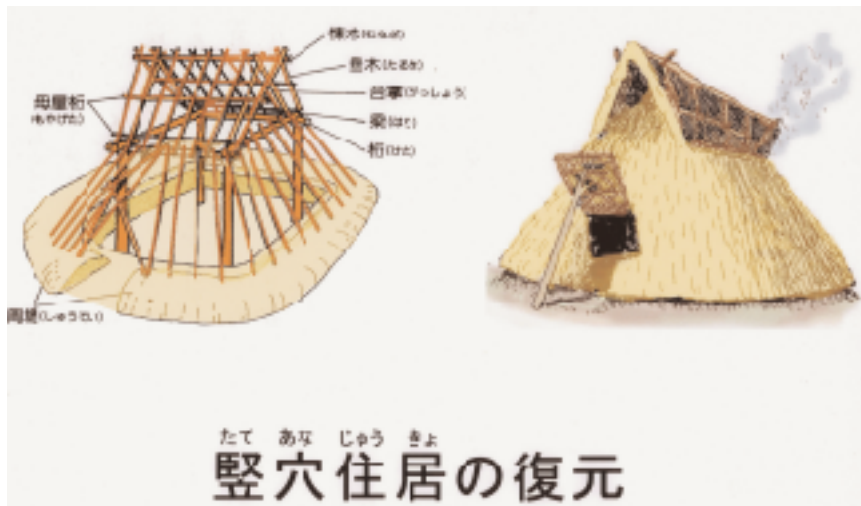


丸木船を使った魚とり



サケとりのようす





住居内のようす

住まいはおもにたてあなじゅうきよ竪穴住居という、地面に穴を掘り、柱を建て、その上に屋根をかけたものでした。

その内部には暮らしに必用ないろいろな道具が置かれていました。なかでも土器は、食べ物を煮たり、物をしまっておくなどの他に、石で組んで炉ろとしとしても使われていました。



縄文前期頃の 竪穴住居のあと

この頃の住居は、3m～5m程の隅丸すみまる長方形をしたもので、中央に太い1本柱があり、壁の周りに細い柱を並べて配置されたつくりになっています。入口部分には、大きな丸い穴が掘られていたようです。



縄文時代中期末頃の 竪住居のあと

この頃の住居は、5m～6mの円形をしたもので、床の四隅よすみに主要な柱が4本配置されたつくりです。住居の一方に石で囲った炉ろが設けられており、この場所は、調理や部屋を暖めるのに使われたところでした。



住居内の複式炉ふくしきろ。2つの土器と石を組み合わせています。

住居の中の炉ろには、石が敷かれ火が焚かれた場所の近くに、2つの土器が床に埋められた所があります。この土器の中では、採集してきた木の实ざいしゅう（トチ・ドングリなど）を、火を焚いた後にでる灰あかを使って灰汁抜きしたと考えられています。

弥生時代

【発展し続ける名取の基礎を築いた弥生時代】

農耕に適した平野が早くから開けていた名取の地は、生業が狩り中心から稲作中心の農耕に移行し始めた当時の人々にとって、理想的な土地であったようです。そこに暮らしていた名取の弥生人は、自然条件に左右されながらも、農耕社会の基盤をより強固なものとし、弥生文化を発展させていったのでしょ

う。名取平野には、名取川を始めとする河川によって運ばれてきた良く肥えた土が堆積していたこともあり、徐々に、より多くの農作物を生み出せるような生産力を確立していったようです。ナイル川流域に発生したエジプト文明が「ナイルのたまもの」と言われたように、名取平野も名取川などの恩恵を受けていたのです。

開墾や治水などの共同作業では、指導者の役割が大きく、彼らは次第に人々の生活全体を支配する権力を握るようになり、豪族と呼ばれる支配者へと生まれ変わっていったのでしょ

う。古墳時代に出現する雷神山古墳や飯野坂古墳群などの大規模な古墳が、ここ名取に数多く存在することは、この地域に豪族がいたことと、それをつくるための経済的な基盤がしっかりしていたことを物語っています。まさに、弥生時代に始まる稲作農耕が、発展し続けてきた名取の基礎となっているのでしょ



【弥生時代の遺跡の分布】

弥生時代の遺跡は、まだ丘陵上に多く分布しています。丘陵付近の湿地帯は、稲作に適していたのでしょ

う。また、この時代になると名取川沿いに発達した自然堤防上（微高地）にも遺跡が見られるようになります。自然堤防の微高地は、排水条件が良いため集落や畑地に適し、その周辺の後背湿地は、稲作に適していたからなのでしょ

弥生時代の地形のようす



【弥生時代の名取の地形のようす】

名取川下流域は、縄文時代の温暖化に伴う海面上昇期であっても、名取川が比較的急流な河川であったので、大量の土砂を下流域に運び、その堆積作用により早くから平野が大きく広がりました。名取川沿いに発達した自然堤防の微高地は、排水条件が良いシルト質の地盤でした。

また、前の時代から始まった海水面の下降によって、丘陵付近に取り残された沼や湿地帯は、弥生時代に入っても残っていたようです。

【米づくりと共に 伝わった西日本の土器】

東北地方の弥生時代の始まりは、西日本より若干遅れて始まります。北九州地方における弥生時代前期の土器は総称して「遠賀川式土器」と呼ばれていますが、その類似する土器が、十三塚遺跡で発見されています。この土器と一緒に米づくりの技術も当地に伝えられたことを物語っています。原遺跡からは、稲穂をつみ取る道具である石包丁や、鎌のように使われた板状石器などの稲作の道具も見つかっています。



原遺跡から出土した石包丁（左）と板状石器（右）



【弥生人が住んだ^{たてあなじゆうきよあと}竪穴住居跡】

弥生時代の^{たてあなじゆうきよあと}竪穴住居跡は、^{いまくまのいせき}今熊野遺跡・^{じゅうさんづかいせき}十三塚遺跡・^{いずみいせき}泉遺跡などで発見されています。これらの住居跡は、当時の住まいの構造を考える上で貴重な資料となっています。また、住居の中からは弥生土器などの生活道具も出土しています。



弥生時代中期頃の竪穴住居跡



弥生時代後期頃の竪穴住居跡

【遺跡で見つかった当時のゴミ捨て場】

^{はらいせき}原遺跡では、弥生時代中頃のごみ捨て場が見つっています。そこからは、たくさんの壊れた土器や石器などが見つっています。中には土器や石器をつくる途中で失敗してしまったと思われるものなどもありました。この南側の区域には当時のお墓がまとまって見つっており、弥生時代の人々も生活する場所・ごみを捨てる場所・お墓をつくる場所などを、きちんと区別していたのでしょう。



まとめて出土した大量の土器



弥生時代のゴミ捨て場の調査のようす



文様のきれいな小型の壺^{つぼ}



発見された^{かめ}甕の^{ふた}蓋



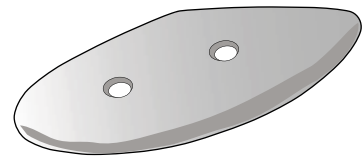
発見された大形の壺^{つぼ}

【弥生時代のお墓〈土器棺墓〉】

これまでの市内の発掘調査では、土器棺墓と土壙墓が見つっています。土器棺墓は、平成9年度に行なった原遺跡の調査で15基がまとまって見つっています。これらは、小児などの遺体や骨を大型の甕や壺に入れ、蓋・甕・鉢型土器などをかぶせて蓋をして、地中に埋めたお墓と考えられています。土壙墓は、十三塚遺跡・泉遺跡などの調査で多く見つっており、地面に穴を掘り、遺体を直接入れて埋葬したお墓です。中からは副葬品として一緒に埋められた、管玉・勾玉・土器・石包丁などが見つかったお墓もあります。特に原遺跡のように、土器棺墓がまとまって発見された例は県内でも少なく、弥生時代の墓制を考える上で貴重な資料と言えるものでしょう。



原遺跡から見つかった土器棺墓群



壺をすえて使った土器棺



壺に蓋を被せ寝かされていた土器棺



出土した土器棺の数々

古墳時代

【古墳時代の名取のようす】

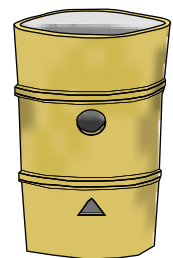
縄文時代の温暖化による海面上昇が終わり、丘陵の裾野まで侵入した海水も弥生時代にはかなり退きました。古墳時代が始まる頃には、海岸線が現在とほぼ同じ位置になり、名取平野が大きく広がりました。

名取川の堆積作用により川沿いに発達した自然堤防や海岸線が後退していく過程で形成された浜堤と呼ばれる微高地上には、周辺の土地に比べ排水条件が良いことから、徐々に集落が営まれていったようです。その微高地の周辺は、水はけの悪い湿地なので、水田として利用したのでしょう。

裾野に湿地がひかえる丘陵だけでなく、周辺に湿地の広がる自然堤防や浜堤は、稲作農耕中心の当時の人々にとって、理想的な土地であったに違いありません。



古墳時代の地形のようす



古墳時代の年表

古墳時代のあゆみ		前期		中期	後期		奈良時代
弥生時代		4世紀 (301~400年)		5世紀 (401~500年)	6世紀 (501~600年)		7世紀 (601~700年)
名取における有力者の墓の変遷	方形周溝墓	低墳丘墓		横穴式石室を持つ古墳			
	方墳・前方後方墳	円墳・前方後円墳		群集墳		横穴墓	
	五郎市遺跡 今熊野遺跡 宇賀崎古墳群	飯野坂古墳群 (高館山古墳)	天神塚古墳 雷神山古墳	小塚古墳 名取大塚山古墳	経の塚古墳 毘沙門堂古墳	賽ノ窪古墳群 山岡古墳	熊野堂横穴墓群 山の前横穴墓群
名取の集落遺跡	山の神遺跡	十三塚遺跡		清水遺跡			
	今熊野遺跡 西野田遺跡	宮下遺跡 野田山遺跡					
世のできて	渡来人が大陸文化を伝える	ゲルマン人の大移動始まる	倭軍が高句麗に敗れる	倭王武が中国に使いを送る	仏教が伝わる	聖徳太子が攝政となる	遣唐使の派遣始まる 大化の改新

【発展し続ける名取の経済的基盤を築いた英雄たち】

古墳時代に現われた雷神山古墳や飯野坂古墳群などの大きな古墳が、名取平野に数多く存在することは、この地域に有力な豪族がいたことと、それをつくるための経済的な基盤がしっかりしていたことを物語っています。名取の祖先が弥生時代から引きついで稲作農耕技術を耕地の開発にとどまらず、古墳づくりなどの高度な土木工事を行えるまでに進歩させていたのです。

豪族が死んだときには、その権力の象徴のために大きな「古墳」に手厚く葬りました。それはまさに英雄のシンボルであったに違いありません。今日の発展する名取の経済的基盤を築きあげたのは、英雄たちだったのです。



私たちと一緒に
古墳時代をのぞいてみてね！



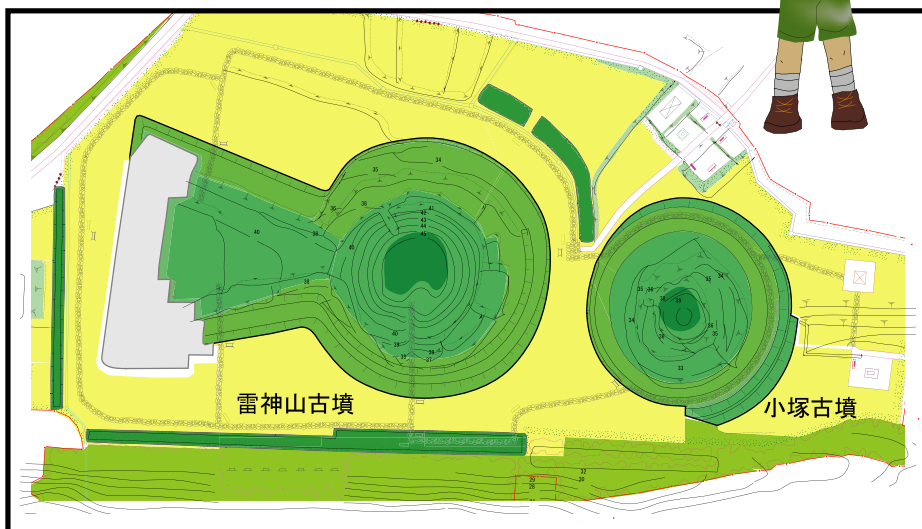
雷神山古墳

雷神山古墳は、標高約40mの丘陵上につくられた全長168mの前方後円墳で、東北地方で最も大きな古墳です。この古墳は、広く仙台平野を治め、周辺の地域をまとめていた王者とも言える豪族のお墓です。つくられた時期は、4世紀の終わり頃（約1600年前）と考えられています。

雷神山古墳はとても、大きな古墳なんだね！



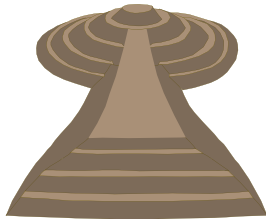
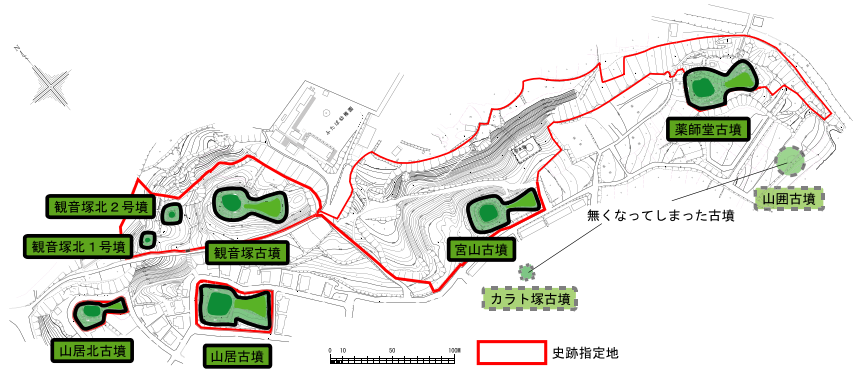
雷神山古墳・小塚古墳の測量図



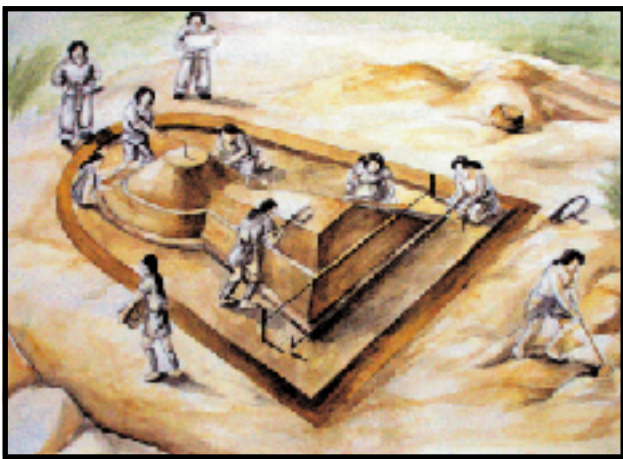
雷神山古墳から出土した底部穿孔壺型土器

ぜんぼうこうほうふん ほうふん いいのざかこふんぐん
前方後方墳や方墳が多くあつまる飯野坂古墳群

いいのざかこふんぐん
 飯野坂古墳群は、名取が丘陵地がある丘陵上の北東端付近に前方後方墳5基と方墳2基が群をなしている古墳群です。これらの古墳は、およそ4世紀代につくられたものと考えられており、南側へ約0.6km離れた雷神山古墳もその間につくられています。また、現在は無くなってしまいましたが、以前はカラト塚古墳（方墳）・山圍古墳（墳形不明）も近くにありました。



古墳の模型をつくっているようす



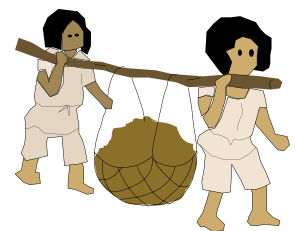
古墳をつくっているようす



古墳をつくるには、
 正確な計算や、大きな権力・財力が必要なのだ！



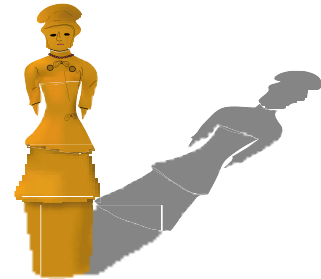
古墳づくりは、
 たいへんでーす。
 みんなの力が必要だね！





古墳にならべる^{はにわ}埴輪を焼いているようす

上手く焼けた
かな？



古墳時代の遺跡分布図



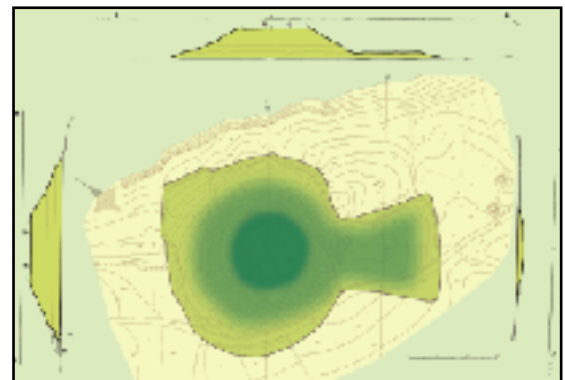
市内には高塚古墳（土を盛ってつくられたもの）が60基以上あり、東北地方で全長50mを超える古墳が最も多く分布しているところです。

この時代は、古墳が増加するだけでなく、関係する遺跡も増え、市内各地からは、たくさんの集落跡（村）が見つかっています。

これらのようすから、当時、この地域が東北地方で最も栄えた場所であったことがうかがえます。

なとりおつかやまこふん 名取大塚山古墳

全長90mの前方後円墳。宮城県内では4番目の大きさで、5世紀中頃につくられた古墳です。



名取大塚山古墳の測量図

しもすだいいづかこふんぐん
下増田飯塚古墳群の遠景



つかねつかこふん
塚根塚古墳の調査の様子



しもすだいいづかこふんぐん
下増田飯塚古墳群

下増田飯塚古墳群は海岸近くの平野に分布する古墳群で、これまで4基だったものが、調査の結果、新しく発見された古墳を含めると20基近い数が見つかっています。

古墳は5世紀後半につくられたもので、7m~50mの円墳が主体です。



塚根塚の中から見つかった小古墳

小古墳の埋葬施設

きょうのづかこふん
現在の経の塚古墳の跡



きょうのづかこふん
経の塚古墳

経の塚古墳からは、鎧や家の形を模した埴輪などが、たくさん見つかっています。

きょうのづかこふん
経の塚古墳から出土した埴輪



いえがたはにわ
家型埴輪



よろいがたはにわ
鎧型埴輪

さいのくぼふんぐん
賽ノ窪古墳群

さいのくぼふんぐん めでしまかさしま きゅうりょうぶ
賽ノ窪古墳群は、愛島笠島の丘陵部に分布している古墳群で、全長32mの十石上古墳を中心に、約30基の円墳（直経20m前後）が分布しています。古墳の年代は、古墳時代の後半、5世紀の終わりから6世紀頃につくられたものと考えられています。



さいのくぼ
姿を現した賽ノ窪27号墳

27号墳からは、横穴式石室と呼ばれる、埋葬施設が見つかっており、そこからは、遺体の他、たくさんの副葬品が見つかっています。



よこあなしきせきしつ
27号墳の横穴式石室のようす



27号墳から出土した土器

くまのどうよこあなぼぐん
熊野堂横穴墓群

きゅうりょうぶ
丘陵の斜面を掘って埋葬施設をつくるのが横穴墓で、蜂の巣状につくられるのが特徴です。7世紀から8世紀にかけてつくられたもので、全体では100基以上にもなるとされています。



入口付近のようす



いたい
遺体を納める部屋の中

げんしつ
玄室入口の前から出土した土器



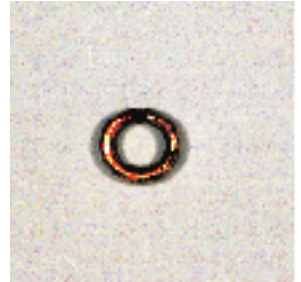
よこあなぼ いたい まいそう
横穴墓の遺体を埋葬
した玄室からは、装飾
げんしつ とうしやく
品や武器類、また、河
原石で蓋をした入り口
の前からは、お供えに
使ったと思われる土器
などたくさん見つか
っています。



まがたま
勾玉



すずくろ
鈴釧



きんかん
金環

【古墳時代の集落のようす】

ごうぞく
豪族の古墳づくりや、新たな耕地開発など
こうちかいほつ
土木工事の労働に従事した人々も、日常は、
各地域の集落で農作業に従事し、日々の暮らしを送っていたようです。当時の暮らしのようすは、住居跡など集落跡の調査により少しずつ分かってきています。

のだやまいせき
野田山遺跡

めでしましおで きゅうりょうぶ
愛島塩手の丘陵部にある遺跡で、古墳時代前期（4世紀）の住居跡が20軒近く発見されています。そこからは、近畿地方の技術でつくられた甕（かめ）など、この地域と交流があったことを示す、貴重な資料が見つかっています。



見つかった竪穴住居跡

近畿地方との交流を示す土器

じゅうさんづかいせき
十三塚遺跡

てぐらだ きゅうりょうえんべん
手倉田の丘陵縁辺にある遺跡です。これまでの調査で、100軒以上の竪穴住居跡が見つかっており、古墳時代前半（4～5世紀）に営まれた大きな集落跡だったことが、分かっています。また、この遺跡は、雷神山古墳や飯野坂古墳群に近い場所にあったことから、これらの古墳づくりにも関わった人々の村であったかもしれません。



姿を現した当時の村

そしやくひん いしくろ
貴重な装飾品の石釧
(石製の腕輪)



火災で焼けた竪穴住居跡



底に穴のある土器が出土したようす

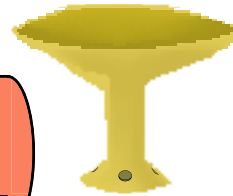
まえのだひがしいせき
前野田東遺跡

めでしまかさしま
愛島笠島の丘陵に

立地し、大塚山古墳や賽ノ窪古墳群の近くにある遺跡です。調査では、たくさんの竪穴住居が発見され、その中には、当時最先端の技術であった、鉄の道具（クワ・刀など）をつくる鍛冶と呼ばれる作業をした場所も見つかっています。



鍛冶作業を行っていた竪穴住居跡



遺跡からはいろいろな物がみつかっているよ



作業場のようす



送風に使われたフィゴの羽口が出土したようす



しもすだいいづかこふんぐん
下増田飯塚古墳群



下増田杉ヶ袋の平野部にある遺跡で、古墳の他に竪穴住居も見つかっています。住居は古墳時代前半（4世紀から5世紀頃）までのもので、その中で、古墳のすぐ近くから発見された住居跡は、古墳づくりの作業に関係した施設だったかもしれません。



古墳の近くで発見された竪穴住居跡

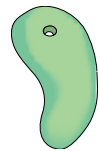


残されていた多くの土器

古 代

【古代の名取のようす】

大化の改新（645）以降、中央政府は全国の土地や人民を直接支配する律令国家の整備を進めました。東北の太平洋側に陸奥国が出来たのも、大化の改新後まもない頃で、現仙台市郡山や多賀城市に置かれた国府を中心に統治されていました。名取郡が成立した時期は詳しくは分かっていませんが、奈良時代の前半頃には設置されていたと推定されています。名取郡は陸奥国府以南の7つの郷（玉前・指賀・磐城・井上・駅家・名取・余戸）で構成されていました。古代の名取も、それまで培って来た技術や生産力などを背景に、さらに発展していったのでしょう。遺跡の数も前代よりさらに数が増えることや、平野部にも広く進出し分布範囲も広がることなどからも、そうしたようすがうかがわれます。



かさしまはいじあと 笠島廃寺跡

かさしまはいじあと めでしまかさしま さえの
笠島廃寺跡は、愛島笠島の佐倍乃
神社（道祖神社）の参道沿いの竹や
ぶの中にあります。かつて行なわれ
た発掘調査で礎石や土壇状の高まり
や瓦が見つかっており、私的な性格
を持った寺院跡ではないかと言われ
ています。

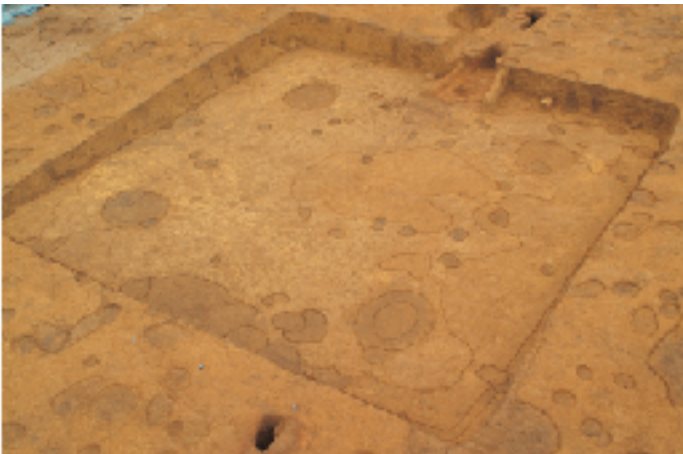
塔の大事な柱を支えた礎石

まえのだひがしいせき 前野田東遺跡

まえのだひがしいせき
前野田東遺跡は、現在の愛の杜地区周辺の標高35m程の丘陵上に広がる遺跡で、長方形に溝で区画された中に規則的に配置された建物跡や竪穴住居跡が多く見つかりました。このような特徴は、当時の役所などの施設に関連するものに見られるもので、この遺跡もそうした性格を持つ施設であったと考えられています。

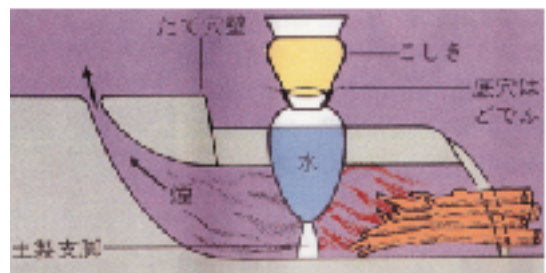


整然と配置された倉庫などの建物跡



竪穴住居跡とカマド

カマド部分には、当時使っていたと考えられる土器の破片などが残っていました。カマド内の土は焼けて赤色に変色していました。



柱を地面に直接すえて
建てた掘立柱建物跡

人が入っている部分は、もともと木の柱が建てられていた場所で、当時は、寺院や大きな役所（官衙など）など瓦屋根のものは、礎石の上に柱を建てましたが、それ以外の多くの建物は、地面を掘って柱をすえたものだったようです。





かじ
鍛冶を行なった豎穴住居跡のようす



住居内で見つかった材料や道具



かまあと
窯跡が見つかったようす

かじ 【鍛冶を行なった作業場】

内部で鍛冶作業を行なったと考えられる豎穴住居跡が見つっています。住居の床の部分には、炉の跡や、作業で出た鉄くずなどを捨てたと思われる穴、鉄くずなどが見つかりました。

かまあと 【木炭窯跡】

区画施設の近くの斜面から、炭を焼いていたと思われる窯跡が見つっています。

すぐ近くの区画施設や、その周りの住居跡などで使用するための木炭を焼いていたのかもしれない。

また、鍛冶作業などにも使われたのでしょうか？

しもすだいいづかこふんぐん 下増田飯塚古墳群

しもすだいいづかこふんぐん
下増田飯塚古墳群では、古代の水田の跡と、水路跡などが見つっています。調査した場所は、浜堤と呼ばれる微高地から低い土地へと続く境目付近の場所です。調査では、作業用の大きな畦道や水田を区画する小規模な畦道、水路からの水の取り入れ口、水路などが見つっています。



浜堤(褐色)と湿地(黒色)の境のようす



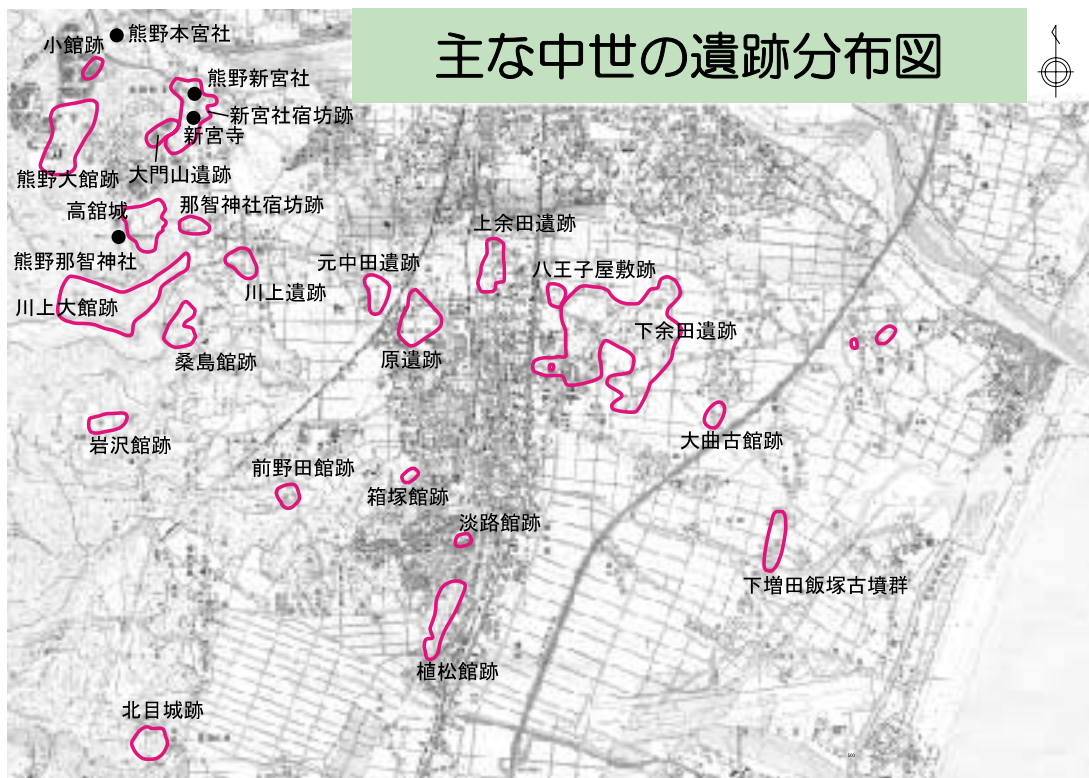
けいはん
水田と畦畔が見つかったようす

中世

【中世の名取のようす】

1189年の奥州合戦で、それまで岩手県平泉を拠点に勢力を伸ばしていた奥州藤原氏が、源頼朝の軍勢に滅ぼされると、名取郡もその家来の武士達に手柄として土地を与えられ、その支配が及ぶようになりました。鎌倉時代の後半頃には、当時幕府で最も権力を握っていた北条氏の領地になったと考えられています。鎌倉幕府が滅びた後の名取郡は、当時の陸奥国の国府（役所）に近い事もあり、南北朝時代を通じて勢力拡大を目指す多くの武士団が争う戦場になっていたようです。当時南朝方であった伊達氏なども名取郡へ出陣し、国府を守る北朝勢と合戦しています。その際、北朝勢は名取の高館山にある羽黒城（高館城）を拠点にしていたようです。

その後の名取郡は、1400年代の初め頃には、徐々に北に勢力を伸ばして来た伊達氏の影響力が強まり、天文11年(1542)以降は伊達氏の領地となりました。



【名取熊野三山と文化財】

名取熊野三山は熊野神社(新宮社)所蔵の縁起によれば、平安時代の終り頃の保安4年(1122)に、名取老女により勧請されたと伝えられ、主に東北の太平洋岸沿いにおける熊野信仰布教の拠点であったと言われています。名取熊野三山は熊野信仰の本場である紀州(和歌山県)熊野三山と同じく、本宮・新宮・那智の三社が個別に勧請されている点に大きな特徴があります。名取熊野三社やその周辺には、熊野信仰に関係する多くの貴重な文化財も残されており、当時から多くの人々が厚い信仰を寄せていた事を物語っています。



くまのほんぐうしゃ
熊野本宮社



くまのどうじゅうにじんしおどり
熊野堂十二神鹿踊

くまのほんぐうしゃ 熊野本宮社

くまのほんぐうしゃ
熊野本宮社は、家津御子神(ケツミコノカミ)と呼ばれる作物の神がまつられ、仏として阿弥陀如来(あみだによらい)があてられています。以前は、500m南の山上にありました

が、江戸時代に現在の場所に移されました。また、神社には、豊作を願い鹿の衣装を付け舞踊る熊野堂十二神鹿踊が伝えられています。



くまのじんじゃ
熊野神社



くまのじんじゃほんでん
熊野神社本殿

くまのしんぐうしゃ 熊野新宮社

くまのじんじゃ
熊野神社は、元は新宮社と呼ばれていました。速玉神(ハヤタマノカミ)をまつり、仏として薬師如来(やくしによらい)があてられ、本殿には熊野三社(ほんでん くまのさんしゃ)が別々に建てられています。

また、この神社には古事記などを題材とし、衣装や面を付け伴奏に合わせ舞う、神楽(かぐら)や舞楽(まがく)などの芸能が伝えられています。



くまのどうかぐら
熊野堂神楽



くまのどうぶかく
熊野堂舞楽

くまのなちじんじゃ 熊野那智神社

くまのなちじんじゃ たかだてやま
熊野那智神社は高館山の山頂にあり、不須美神(フスミノカミ)をまつり、仏として観音菩薩(かんのぼさつ)があてられています。ここには、神と仏が一体となった信仰を示す、鎌倉~室町時代の懸仏(かけぼとけ)が残されています。



くまのなちじんじゃ
熊野那智神社



くまのなちじんじゃかけぼとけ
熊野那智神社懸仏





しんぐうじもんじゅぼさつぞう
新宮寺文殊菩薩像



しんぐうじいっさいきょう
新宮寺一切経

しんぐうじ
新宮寺
しんぐうじ くまのじんじや しん
新宮寺は熊野神社（旧新宮社）と関係が深く（別当寺）一体となっていた寺です。この文珠堂には、平安時代の終わりから室町時代（12世紀末～14世紀）にかけて、当時の人々が書き写したたくさんのお経（一切経）が収められています。

また、お堂の中には、お経を守るように、文殊菩薩と4体の像があります。



だいまんやまいせき
大門山遺跡

だいまんやまいせき
大門山遺跡
だいまんやまいせき しんぐうじ きゅうりょう
大門山遺跡は、新宮寺の裏側の丘陵斜面にあり、熊野三山信仰が盛んだった鎌倉から室町時代（13～14世紀）にかけて営まれていたものです。ここからは、板碑と呼ばれる石碑などがたくさん見つかることから、当時熊野三山を信仰した人々が先祖の供養など行なう場所だったと考えられています。

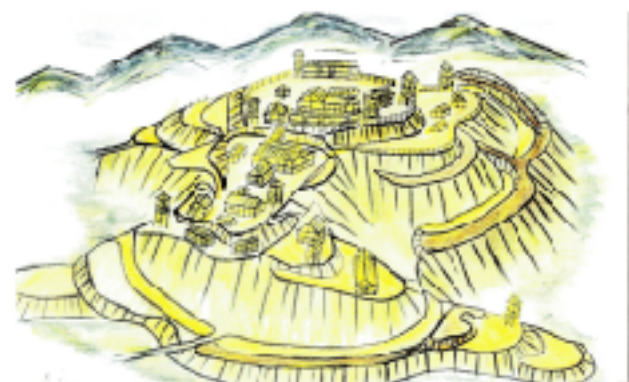
【中世の山城と平地の館・屋敷】

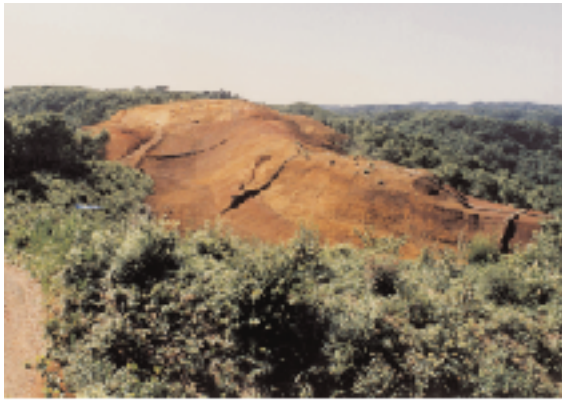
市内には、鎌倉時代から戦国時代頃にかけてつくられた、山城や館・屋敷の跡があります。山城は文字通り丘陵部のけわしい地形を利用してつくられた戦いのための施設で、日常的に居住するためのものではなかったようです。また、平野部を中心につくられた館や屋敷跡は、柵や堀・土塁などで囲まれ、中に母屋や馬屋・倉庫などを配置した地域の有力武士などの居住施設で、戦いのための機能もある程度備えていました。彼らも通常は、そこを拠点に配下の人々を指導し、自らも農業を行なう農業経営者でもありました。堀にためた水は灌漑のための用水でもありました。

やかた やしきあと
平地の館・屋敷跡のイメージ



やましろ
山城のイメージ





くまのどうおおだてあと
熊野堂大館跡

くまのどうおおだてあと どうじきるい
熊野堂大館跡から出土した陶磁器類

現在のゆりが丘地区にあったもので、標高200m程の山頂につくられた山城です。施設は大きく3つの部分に分かれており、全体の面積は8万㎡にも及ぶものでした。ここからは、数多くの建物跡と共に、当時使われた陶磁器類がたくさん見つかっています。この山城が使用されていたのは、14世紀頃と考えられています。



もとなかだいせき
元中田遺跡

もとなかだいせき たてあと
元中田遺跡の方形の堀で囲まれた館跡

この遺跡は、高館吉田地区の標高9m程の沖積地に立地しています。二重の堀に囲まれた方形の形をし、外堀は一辺150m、内堀が80mもある大規模な方形館跡です。調査では建物の一部と、内堀にかかる土橋などが見つかっており、館跡のようすから、15～16世紀頃のものとして推定されています。

はらいせき
原遺跡

田高地区にある原遺跡からも、二重の堀に囲まれた館跡が見つかっています。外堀は一辺60mで、内堀の中心区域から、主要な施設と思われる建物が数多く見つかっていますが、



内堀と外堀の間には、あまり施設は無かったようです。館跡の年代は、13世紀終わりから14世紀にかけてのものと考えられます。

はらいせき やしきあと
原遺跡の屋敷跡

近世～

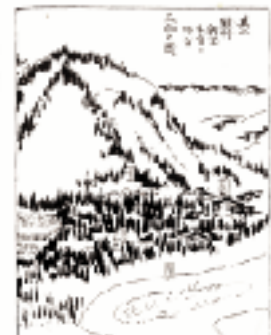
【近世の名取のようす】

仙台藩政時代の名取市域は、仙台藩領の南部に位置した、名取郡南方の北側を占める23ヶ村で構成されていきました。市域のほぼ中央には、南北に延びる江戸往来の奥州街道が整備され、増田には宿駅が置かれました。当時の名取は、街道と宿場町を中心に、仙台藩が直接治めた土地として、藩や仙台北城下へ米などの食糧提供の役割を担い発展していきました。さらに、海岸部の閑上湊は仙台藩の外港として、内川（木曳堀、後の貞山運河）は、米や木材輸送の幹線として重要な役割を果たしていました。



【藩政時代の主な街道】

藩政時代の主な街道には、市の中心部を南北に延びる奥州街道、西部の丘陵沿いには東街道が、海側の東部には浜街道がありました。こうした街道は多くの人々や物資などが往来したものと思われます。中には街道沿いのようすや周辺の名所・旧跡などの記録を残した人がいて、当時のようすを知る事が出来ます。こうした街道沿いには、往来する人のために道標などが立てられた場所もありました。また、閑上土手の松並みは漁船が閑上港へ寄港する際の、灯台がわりに目印にしていたとも伝えられています。



増補行程記(左)と奥州名所図会(右)



ごほう つじひ どうひょう
五方の辻碑 (道標)



どうそじんろ ひ どうひょう
道祖神路の碑 (道標)



ゆりあげどて まつなみ
閑上土手の松並



ていざんうなが
貞山運河

ていざんうなが
貞山運河：仙台藩から江戸へ、米などの物資を運ぶために、北は石巻の北上川、南は岩沼の阿武隈川の間を開削したもので、全体の長さは、33kmにも及びます。

ごほう つじひ
五方の辻碑：高館吉田の旧東街道にある、村田・閑上・秋保方面など五つの街道の分岐点にある道しるべです。

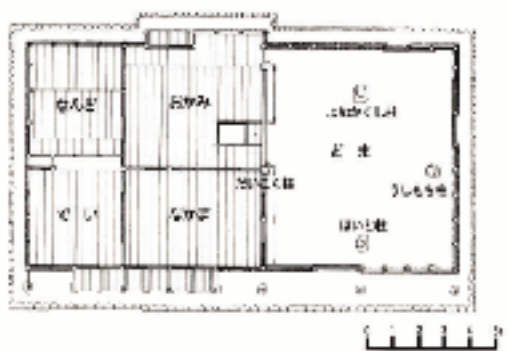
どうそじんろ
道祖神路の碑：館腰植松の旧奥州街道沿いにある碑で、仙台北下や道祖神社までの距離が記された道しるべですが、一面に松尾芭蕉の句が刻まれていることから、芭蕉の句碑とも呼ばれています。

ゆりあげ
閑上土手の松並：名取川河口付近の南側の堤防沿いにあり、現在48本のクロマツが残っています。樹齢は230年を超え、閑上から仙台北下への街道沿いに植えられた松が残ったものです。

【旧中沢家住宅と洞口家住宅】

旧中沢家住宅と洞口家住宅は、江戸時代の名取地方の農家のようすを今に伝える貴重な建築物として、国の重要文化財に指定されています。旧中沢家住宅は18世紀に建てられた中型農家、洞口家住宅は18世紀中頃に建てられた大型農家で、どちらも土間と座敷の間は開放されており、土間は数本の独立した柱が建ち、座敷は平面形が漢字の田字型となる四間取りで、名取地方の旧家に特徴的に見られるものである事から、名取型の間取りと呼ばれています。

重要文化財旧中沢家住宅平面図



旧中沢家住宅



旧中沢家住宅の土間のようす



洞口家住宅



洞口家住宅の居室のようす



かまがみ 釜神



ごけんちちょう 御検地帳

こうした旧仙台藩領の旧家には、民間信仰として伝わった土製や木製のカマガミサマと呼ばれる恐ろしい表情をした面が多く見られましたが、近年はこうした風習も行なわれなくなりました。写真のものは、館腰地区の民家のカマド近くの「よめかくし柱」に、火の神様としてまつられたと思われるものです。

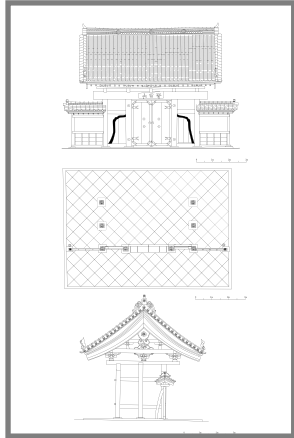
農家などが耕作する田や畑は、藩の経済を支える重要なもので、それぞれの収穫量・境界・地価などを決めるための検地と呼ばれる検査を受け、その結果を記した台帳である検地帳が作成されました。名取郡では、寛永19年(1642)の上増田・下増田・熊野堂の検地を初めとして数回の検地が行われました。検地帳を見ると田畑は上々、上、中、下、下々の五等級に分けられていました。

農家などが耕作する田や畑は、藩の経済を支える重要なもので、それぞれの収穫量・境界・地価などを決めるための検地と呼ばれる検査を受け、その結果を記した台帳である検地帳が作成されました。名取郡では、寛永19年(1642)の上増田・下増田・熊野堂の検地を初めとして数回の検地が行われました。検地帳を見ると田畑は上々、上、中、下、下々の五等級に分けられていました。

【市内に残る 近世以降の建造物】



こうりゅうじさんもん 耕龍寺山門



こうりゅうじさんもん 耕龍寺山門 仙台藩家老の片倉家の白石城の門の一つを、伊達家の白石城の門の一つを、伊達家と縁が深いこの寺に、明治の初めに移築したものと伝えられています。

にかいだてどぞうづくりそうご 二階建土蔵造倉庫 旧国道4号線(奥州街道)沿いの増田の商店が並ぶ一画にあり、ケヤキの太い柱を使った白壁塗り(なまこ壁)の丈夫につくられた木造倉庫で、明治10年頃につくられたものです。



かいうんばし 開運橋



どぞうづくり 修理前の二階建土蔵造倉庫

かいうんばし 開運橋 閑上の貞山運河にかけられたもので、長さ30m、幅3.3mの鉄筋コンクリートづくりです。つくられたのは昭和3年で、市内に現存する唯一のアーチ橋です。

【名取市の歴史と文化財年表】

年代	時代区分	名 取 市		宮 城 県	日 本
		主な出来事・遺跡		主な出来事	主な出来事
B.C 18000	旧石器時代		◎狩猟の生活	狩猟の生活	狩猟の生活
1000	縄文時代		○野田山遺跡 ○西野田遺跡		
3000	弥生時代		◎稲作伝わる	稲作伝わる	稲作伝わる
A.D 300	古墳時代		○飯野坂東遺跡 ○十三塚遺跡 ○原遺跡 ○清水遺跡(神明団地区)		大和朝廷による 日本統一
593	(飛鳥時代)		◎陸奥国成立		593~622 聖徳太子の摂政 645 大化の改新
710	奈良時代	713 ◎丹取郡が置かれる 728 ◎丹取軍団を改め玉作軍団とした	○清水遺跡 ○南台窯跡	721 柴田郡から刈田郡を分割 737 陸奥出羽の連絡路を開く	701 大宝律令 710 平城京遷都 743 墾田永年私財法 749 養老律令施行
769		◎名取郡の人・名取朝臣を賜う・の記録が見える		749 陸奥国から貢金	
785		◎続日本紀に名取以南14郡の記録が見える	○今熊野遺跡(鴻巣地区) ○笠島廃寺跡	780 伊治公磐麻呂反乱	794 平安京遷都
794	平安時代	815 ◎名取軍団が交代(6軍団)で城柵の守備にあたる ※「和妙抄」に名取郡は指賀郷・井上郷・余部郷・駅家郷・玉崎郷・磐城郷・名取郷が見られる	○北東宮下遺跡 ○前野田東遺跡	802 坂上田村麻呂胆沢城を築く 869 陸奥国に大地震あり 934 陸奥国分寺七重塔雷火で焼失	902 荘園整理令出る 935 平将門の乱
1123		◎熊野三社が勧請されたという		1051~62 前九年の役 1083~87 後三年の役	1086 院政始まる
1189		◎名取郡司・熊野別当が合戦の後に釈放	○新宮寺文珠菩薩 ○川上遺跡 ○大門山遺跡○元徳の碑 ○那智神社懸仏 ○高館城跡○熊野堂大館城跡 ○新宮寺一切経	1189 源頼朝平泉を攻める	1185 源頼朝守護地頭を置く 1221 承久の乱
1333	鎌倉時代			1333 北畠顕家 義良親王を奉じて多賀国府へ入る	1274 蒙古軍来襲 1333 鎌倉幕府滅亡
1338	南北朝時代	1351 ◎熊野別当益田(増田)に関所設置	○原遺跡 ○下余田遺跡 ○元中田遺跡	1351 岩切合戦 1352 多賀国府 足利方の手に落ちる	1338 足利尊氏 征夷大将軍になる
1392	室町時代	1406 ◎伊達氏名取郡へ進出			1392 南北朝合体

年代	時代区分	名 取 市	宮 城 県	日 本
1467	戦国時代			1467～77 応仁の乱
1573	安土桃山時代	1586 ◎秀吉益田（増田）関所を廃止、その後増田と改称 1596 ◎伊達正宗名取郡に検地を行う		1573 室町幕府滅亡 1590 豊臣秀吉の全国統一
1600 1603	江戸時代	○熊野神社本殿	1600～1603 仙台北城下の街づくり	1600 関ヶ原の戦い 1603 徳川家康征夷大将軍となる
		1616 ◎増田の宿場がつくられる	1605 松島瑞巖寺と改称 1613 支倉常長ローマへ（延宝年間）	1635 参勤交代の制
		1648 ◎増田の街づくり始まる	仙台古城記の編集 蔵王山爆発	
		1668 ◎貞山運河完成（阿武隈川～名取川まで） 1678 ◎上増田外七ヶ村新田検地 ○閑上土手の松並 ○中沢家住宅○洞口家住宅		1716～1745 享保の改革
1868	明治時代	1772 ◎封内風土記 25巻成る ※封内風土記によれば1650年増田の街づくりのため大塚・狐塚・馬塚・天神塚・神明塚・守宮塚と言う大きな古墳が崩される	1838 宮城・名取・亶理郡など、大暴風雨で多くの死者を出す	1787～1793 寛政の改革 天保の改革
		○耕龍寺山門（移築）	1771 仙台藩廃止で仙台県となる 1172 仙台県が宮城県	1867 大政奉還 1868 明治維新 戊辰の役 1869 版籍奉還 1872 学制の発布
		1874 ◎学制により、名取郡の大区詰所増田に置く 1875 ◎増田に警察小屯地設置される 1876 ◎明治天皇東北巡幸の増田御休所建てられる ○二階建土蔵造倉庫建築	1876 明治天皇東北巡幸	
		1880 ◎増田・閑上の郵便局開設 1888 ◎増田駅営業開始 1889 ◎市町村施行で6ヶ村（東多賀村、愛島村、増田村、高館村、館腰村、下増田村）となる 1896 ◎町制施行により増田村が増田町となる 1906 ◎増田図書館設置		1889 大日本帝国憲法発布 1894 日清戦争
1912	大正時代		1918 県内で米暴動	1914 第一次世界大戦 1923 関東大震災 1925 普通選挙制
1926		1926 ◎増東軌道営業開始（閑上～増田駅） ○開運橋竣工	1928 仙台放送局放送開始	
	昭和時代	1928 ◎東多賀村が町制により閑上町となる 1929 ◎閑上港開設 1948 ◎増田町・閑上町に自治警察発足 1955 ◎2町（増田・閑上）4ヶ村（愛島・館腰・下増田・高館）を合併し、名取町となる ◇雷神山古墳国指定（1968年追加指定） 1956 ◎仙台空港開港 1958 ◎市制施行で名取町から名取市となる		1941～1945 太平洋戦争 1946 日本国憲法発布 1951 サンフランシスコ平和条約
		1966 ◇那智神社の懸仏・銅鏡が県指定 ◇衣笠の松・笠島廃寺跡・熊野堂横穴墓群が市指定 1971 ◇洞口家住宅国重文指定（1985年追加指定） 1972 ◇文殊堂一切経・熊野堂古代神楽（現熊野堂神楽）・熊野本宮 社付属獅子舞踊（現熊野堂十二神鹿踊）・道祖神神楽・花町神楽・閑上大漁唄込み踊・下増田麦搗き踊が市指定 ◇那智神社の懸仏・銅鏡が国指定		
		1976 ◇飯野坂古墳群市指定 1978 ◇飯野坂古墳群国指定 1982 ◇名取熊野新宮社奥の院が市指定 1985 ◇名取熊野新宮社奥の院が県指定 1986 ◇熊野堂神楽・道祖神神楽が県指定 1987 ◇新宮寺文殊堂一切経が国指定		
1989		1990 ◇十三塚遺跡・大門山中世墓所供養所・高館山古墳・名取大塚山古墳・高館城跡・十三塚遺跡出土弥生土器・雷神山古墳出土遺物・熊野堂大館跡出土遺物・熊野神社文書・御検地帳・釜神様・熊野堂舞楽が市指定 2003 ◇熊野堂舞楽が県指定 2007 ◇手倉田拵取り舞が市指定 ◇開運橋・五方の辻碑・道祖神路の道標・伊達持宗公夫妻供養五輪塔・元徳の板碑・（熊野神社所蔵：神楽面・舞楽面・木造狛犬・宮太鼓・鉦）・（新宮寺所蔵：経櫃・経篋・経机・（熊野堂横穴墓出土：鈴釧）・（洞口家所蔵：木製半唧筒）・野田山遺跡・毘沙門堂古墳・閑上土手の松並が市登録		

発行：名取市教育委員会
〒981-1292
宮城県名取市増田字柳田80
名取市教育委員会 TEL.022-384-2111
2009年3月